

〈礼拝説教〉 2009年10月4日

どんな人でも滅びることは天の御心ではない

マタイによる福音書 十八章六一―十四節

ミカ書

七章十四―二十節

武田真治

## 1、教会の交わりへのみ言葉

このマタイによる福音書の十八章は、イエス様の言葉がまとめて書かれてあるのですが、そのテーマは弟子たちの間で起こっている様々な問題に関するイエス様の教えです。その意味では、現在の私たちの教会の交わりでも起ってくる問題と言えるでしょう。私たちのこの教会に対するイエス様からのアドバイスと考えて良いのです。

今日の箇所は六節もそのように受け止めることができます。即ち『わたしを信じるこれらの小さい者の一人をつまずかせる者は、大きな石臼を首に懸けられて、深い海に沈められる方がましである』です。このイエス様の言葉は、この後十四節までの今日の箇所全体を貫く教えであると言えます。このイエス様の言葉を正しく受け止めるためには、まず「小さな者」という言葉が誰のことを指すのか？ということが定めなければならないでしょう。

## 2、「私を信じる小さな者」

この「小さな者」については大きく分けて2つの読み方があります。

一つは「幼い子供」であろうという読み方です。これは、この直前に『イエスは一人の子供を呼び寄せ、彼らの中に立たせて、言われた。「はっきり言っておく、心を入れ替えて子供のようにならなければ、決して天の国に入ることはできない。わたしの名のためにこのような一人の子供を受け入れる者は、わたしを受け入れるのである。』とあるからです。

その上で、だから子供たちをないがしろにしたり、一人前に扱わない大人や教会は問題であると言われているのだと述べる解釈者もいます。

確かに、ここで「小さい者」と呼ばれている人たちが「子供たち」を指しているということは否定しようがないことです。しかし、すべての子どもたちに対して言われているのかというとそうではありません。イエス様は『私を信じるこれらの小さい者の一人を』とおっしゃっておられます。イエス様のことを信じている子供たちのことなのです。

ですから、その子供たちを『つまずかせる』ということは、その子供たちのイエス様を信じようと

している心や思いを「挫いたり、無にしてしまう」ことと言えるのではないのでしょうか？一般論として子供を大事にしろという教えではないのです（それは当たり前の行為です）。

また、2つ目の読み方は、この「小さな者」を先ほど引用しましたイエス様の直前の言葉『心を入れ替えて子供のようにならなければ、決して天の国に入ることはできない』という教えに即して「心を入れ替え＝自分のこれまでの人生を反省し、罪を悔い改めて」「子供のようになった＝洗礼を受けて新しく生まれ変わった」人たちのことを指しているという読み方です。これによれば「小さな者」とは「洗礼を受けた人」ということになります。

そのように採りますと次のイエス様の『私を信じるこれらの小さい者の一人を』という言葉にも良く続きます。これは信じて罪を告白し洗礼を受けた者たちであり、そして敢えて「小さい者＝幼い者」と呼ばれるのは、イエス様を信じてまだ洗礼を受けたばかりの人たちや信仰生活を始めてまだ日の浅い人たち、いわゆる信仰の初心者の人たちのことを指しているとも考えられるのです。

そして、その彼らを『つまずかせる』ということは、まだ信仰に入ったばかりの、それこそまだ「幼い」信仰であるかもしれないけれども、イエス様を信じようとしている心や思いを「挫いたり、無にしてしまう」ことが問題にされていると言えるのではないのでしょうか？

### 3、一心の幼き信仰こそ

以上のように、この2つの読み方各々どちらにしても、いわば「イエス様を信じよう、信じたい」とその幼い心で、また純粋な心で思っているその「心や願い」を「否定してしまう、軽く扱って台無しにしてしまう」行為を私達が為すことをイエス様が怒りを込めて罵倒しておられると採ることができるのです。しかも、これは最初に申しましたように「教会の交わりに対する」教えですから、教会の中でそのようなことが行われぬように厳に戒めておられるということになります。

その一人をつまずかせる者は『大きな石臼を首に懸けられて、深い海に沈められる方がましである』とまでおっしゃっておられます。これは一説では、当時のローマの刑罰の一つではなかったかと言われています。犯罪者に強く辱めと恐怖を与える罰として、広く人々に知られていたようです。しかし、そのようなひどい刑罰を受けた方が、神様からの刑罰を受けるよりは、まだましだとおっしゃっておられるのです。

どうしてでしょうか？

私が思いますのは、イエス様が本当に「子供たちの幼心から来る信仰や思い」や「悔い改めて新し

く生きようと決心された方々のその信仰や決意」を何とかして守ろうとしておられる強いお気持ちが  
おありだからではないかと思うのです。

幼い心でイエス様を信じますという純粋な思いや福音に触れて新しくやりなおそうと心新たに  
おられる方々の真剣な思いを、訳知り顔で侮ったり、まだまだ何も分かっていないと先輩顔を吹かし  
たり、わざとこの世擦れた手あかのついた知識を吹き込んで自分がさも達者な者であるかのように  
吹聴する「先輩の信仰者」に対して、イエス様ご自身が断固「立ち向かわれる＝その者を捨て置かな  
い」と宣言しておられると思うのです。それ程に強く「幼き者たちの一心な信仰」を守るぞと宣言し  
ておられると思うのです。その熱い御思いがこれ程の厳しい表現をされた理由なのではないでしょ  
うか。

#### 4、「世の中」がつまずかせる

なぜ、これ程までに「幼き者たちの一心な信仰」を守ろうとされるのでしょうか？

その答えが次の七節に語られています。即ち『世は人をつまずかせるから不幸だ。つまずきは避け  
られない。だが、つまずきをもたらす者は不幸である』です。

この世の中というものは、平気でそのような「信仰」を壊そう、台無しにしようと迫ってくるもの  
だと言われているのです。

確かに、この世の中は、まじめな神様への信仰や一心に神様を礼拝する思いを「ばかにする」だけ  
でなくなんとかして「貶（おとし）めてしまおう」「自分たちと同じ、くだらない人間である」ことを  
確認して、安心したいのです。それみたことか、人間なんて変わらない、新しくなることなどないと、  
それで自分たちの不信仰さをこれでいいと納得させたいだけなのです。

どんなにか私たちはこのような世の中の「悪趣味」につき合わされ、傷付けられ、粉々にされて来  
たことでしょうか。私の家の子供たちも、お祭りに参加しないことだけで、どれだけ小学校で「省け者・  
のけ者」にされたことでしょうか。皆様も各々ご経験がおありではないでしょうか？

しかも、その世の中の信仰をつまずかせる行為は、残念ながら『避けられない』ことなのだとおっ  
しゃるのです。つまり、世の中の人が自分の信仰や神様への思いを守ってくれるとか、尊重してくれ  
るということはありません、それは甘い考えだとおっしゃっておられるのです。

だから逆に、イエス様が『私が守らなければ』と言われるのだと言えるのではないのでしょうか？

それが『だが、つまずきをもたらす者は不幸である』という言葉の持つ意味でもあります。つまり、

つまずきは避けられないけれども、そのつまずきをもたらす「この世の者たち」に対しては、神様が裁きを与えられるから彼らは『不幸（＝災い）である』と言われているのです。私達とすれば、自分たちの力でそれらと戦って、ギャフンと言わせようとするのではない、その裁きは神様にお任せしようということです。

## 5、つまずきをもたらさないため

そして『もし片方の手か足があなたをつまづかせるなら、それを切ってしまいなさい。両手両足がそろったまま永遠の火に投げ込まれるよりは、片手片足になっても命にあずかる方がよい。』というこれも厳しい言葉を語られます。

ここで大事なことは、今まで語られてきた「小さな者たち」をつまづかせるような「手や足ならばそれを切ってしまいなさい」とは言われていないという点です。ここではむしろ「あなたをつまづかせる手や足」のことが問題になっているのです。

このような実に思い切った表現を使われることによって、私たち自身が自らの「心からの信仰や真剣な神様への思い」を自分で台無しにしてしまうようなことをしないで欲しいというイエス様の強い思いが表わされているのではないのでしょうか？

時には、敢えてそのようなこの世とのつながりや関係と「手を切る」ことや足しげく通う場所からの「足抜け」をしなければならない時、またそのような経験をさせられる時があるのではないのでしょうか？私達の「信仰」を守るために！

後から考えたならば、神様が敢えてそのような関係や習慣を断ち切られることによって、自分の信仰が守られたと思える出来事があったのではないのでしょうか？少なくとも私にはそのような経験があります。

せめて、自分の「心・魂・信仰」は自分で大事にしていく者でありたい。イエス様がそのような私達の「真剣な神様への思い」を守ろうとしてくださっているのですから。

(礼拝説教より抜粋)